

令和4年度 校内研修計画

平戸市立生月中学校

1 はじめに

(1) 昨年度の取組について

『分かった!』『できた!』を生徒に実感させる授業づくり」を研究主題に、各教科で協働的な学習活動を取り入れた。学力向上プランでは、ワークシート等の活用や定期テストでの記述式問題など、「書く活動」に重点を置いて指導した。また、基礎学力タイムを初めて実施した。生徒に行った授業改善アンケートの結果は次の通りである。(数値は%)

質問項目	よくあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
授業のめあてが示されている	67.5	25.1	5.5	1.9
授業のまとめが行われている	46.5	38.2	11.1	4.2
書く活動が充実している	53.3	31.1	12.7	2.9
友人と協力する学習が行われている	56.7	34.7	7.8	0.8
授業がよくわかる	38.7	49.0	11.7	0.6
基礎学力タイムは充実していた	53.8	35.8	7.5	2.8

(2) 標準学力調査(1月実施)の平均正答率

【観点別】 目標値比 上 下 (※学年は昨年度のを示す)

国語		全体	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む
1年	目標値	58.5	58.3	57.2	51.0
	本校	64.7	64.9	62.9	64.8
	全国	61.4	61.1	60.0	52.8
2年	目標値	59.1	65.4	53.8	52.0
	本校	59.2	63.8	55.0	56.1
	全国	62.0	68.3	56.5	54.7
数学		全体	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む
1年	目標値	60.0	65.8	42.5	49.2
	本校	58.6	64.4	41.4	50.7
	全国	57.0	63.2	38.2	46.4
2年	目標値	56.9	60.5	49.0	48.1
	本校	47.6	52.0	38.0	36.9
	全国	55.9	60.3	46.3	44.9
英語		全体	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む
1年	目標値	57.3	60.7	50.0	57.7
	本校	71.0	74.4	63.8	79.6
	全国	55.2	58.7	47.8	55.3
2年	目標値	50.9	58.6	41.1	50.0
	本校	56.7	62.3	49.5	59.9
	全国	46.9	56.0	35.3	45.5

【基礎・活用】

		国語		数学		英語	
		基礎	活用	基礎	活用	基礎	活用
1年	目標値	60.9	53.9	65.6	43.1	58.6	53.9
	本校	66.1	62.1	63.6	43.5	72.1	68.2
	全国	63.9	56.8	63.0	38.9	56.4	52.3
2年	目標値	61.7	53.9	59.8	48.1	54.5	43.0
	本校	61.1	55.3	51.2	36.9	59.3	51.0
	全国	65.0	56.0	59.6	44.9	51.0	38.0

【記述解答】

		国語		数学		英語	
		1年	2年	1年	2年	1年	2年
目標値		52.5	52.5	32.5	35.0	47.5	32.5
本校		65.5	56.5	25.9	28.0	69.0	47.6
全国		54.3	55.6	22.9	31.6	44.7	25.4

(3) 昨年度末に確認したこと

- ① 協働的な学習活動の継続（その基盤となる学級力の向上、開発的生徒指導の実践）
- ② 「書く活動」を重視した指導の継続
- ③ ワークシートの工夫
 - ア 単元を見通したワークシート
 - イ 説明する力を付けるために、「つまり～」「例えば～」によって、自分の言葉で書く活動を取り入れる。⇒帰納や演繹による論理的思考力
 - ウ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価
- ④ 基礎・基本の定着のために（重要語句や公式など覚えておくべきもの）
- ⑤ 数学的な力の重点的指導（教科横断的に）
- ⑥ 読み取る力の重点的指導（各教科共通に）
- ⑦ 基礎学力タイムの更なる充実
- ⑧ 全国学力調査の活用については、過去問を生徒に解かせるだけでなく、傾向を捉え各教科で共通して活用する必要がある。例えば、「読み手の立場に立って文章を整える」「叙述を根拠に自分の考えを持つ」「複数の資料から関係性を見出す」など。授業の中で、書き方のモデルを指導する。(③イ)

2 キーワードは「協調」

(1) 「みんな仲良く」ではない

新明解国語辞典によれば、「相違点・利害などを譲り合い、共通の目標に向かって歩み寄ること」とある。人にしろ国にしろ、違いや利害があるのは当たり前。みんな仲良くなればそれに越したことはないが、馬が合わない人間はどこの世界にもいる。大事なのは、共通の目標に向かって何事かを行うときには、そういう違いや対立をひとまず脇に置いて力を合わせることはないだろうか。

世界には200余りの国があるが、気候変動などの地球環境問題については協調して対処しようとする気運がある。一方、国連の安全保障理事会が機能しないのは、自国の立場や利害に固執して協調でき

ないためである。

ところで、多様性が叫ばれる時代である。金子みすゞの「みんなちがって、みんないい」は、誰もが口にするようになった。当然、学校も多様性。インクルーシブ教育もそういう時代の流れの一環である。では、どうすれば協調できるか。

(2) 『学び合い』

生徒が自分たちで、時間内に全員が授業の「めあて」を達成することを目指す、それが『学び合い』の授業である。自分だけ、自分と仲の良い友達だけでは、全員が達成することができない。そこには、仲の良い悪いを越えた協調する姿勢がなければならない。「一人も見捨てない」学級風土がなければならない。分断と対立ではなく、多様性と協調の時代に『学び合い』を実践するのはそのためである。ちなみに、今はやりのSDGsも、「誰ひとり取り残さない (No one left behind)」という考え方が基本にある。

さて、本校は市へき地・小規模校教育研究連盟の加盟校である。へき地教育と言えば、「ずらし」と「わたり」を基本に複式授業を行うのが通例であった。だが、異学年間、異教科間でもできる『学び合い』なら、複式学級でも実践可能である。『学び合い』の可能性は広いと言える。

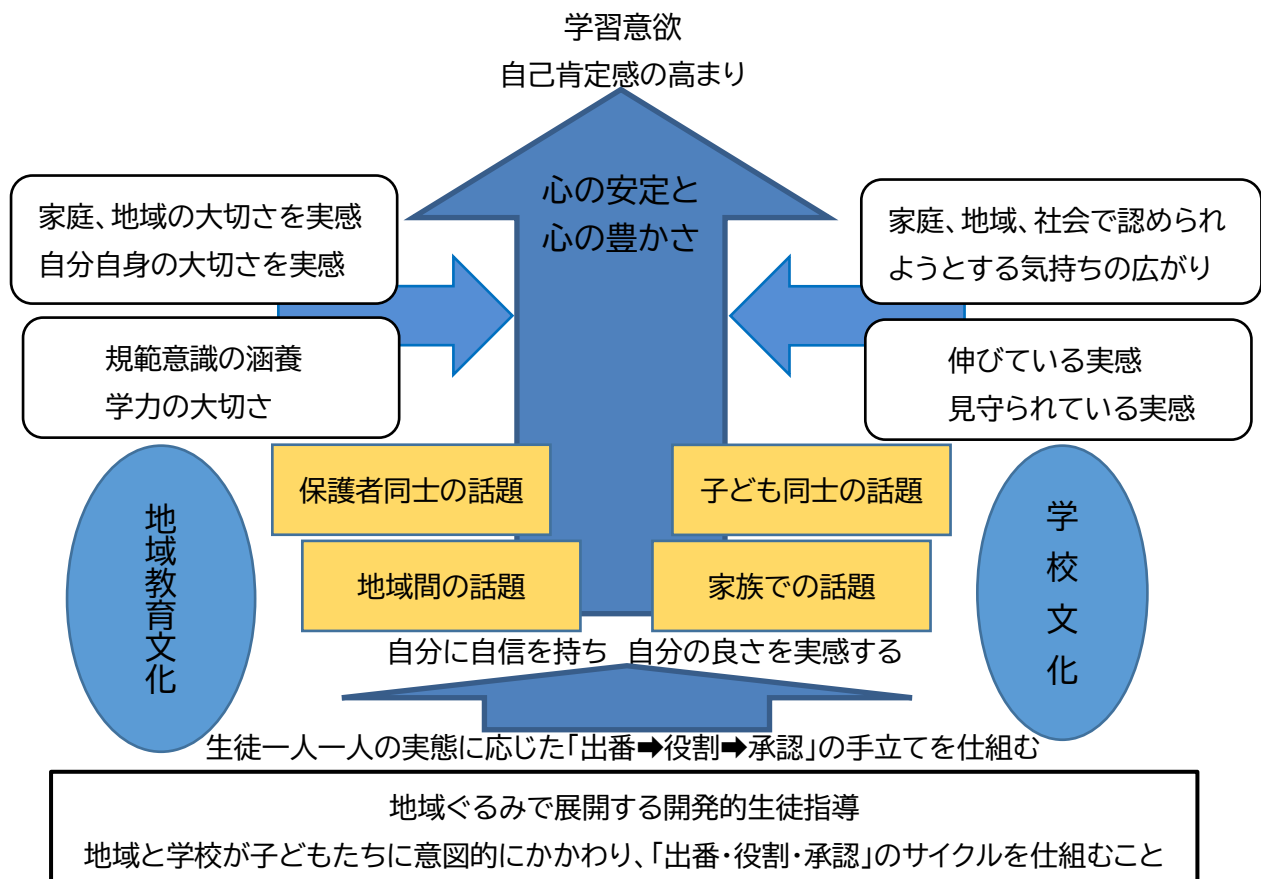
3 研究主題について

(1) 研究主題

協調して課題解決を目指す生徒の育成
～協働的な学習活動と開発的生徒指導を通して～

(2) 開発的生徒指導の基本デザイン～自己肯定感の高まりと学習意欲～

次の図は、一昨年11月に校内研修へ招いた貞包浩洋先生（佐賀市立鍋島中学校長）の資料による。



(3) YOUは何しに学校へ

教育基本法

第1条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

第9条 法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。

何も14歳か15歳で人格は完成するものではないし、大人でも人格が完成した人は、そういるものではない。人格とは、完成されるものではなく、常に完成を目指されるものではないだろうか。そう考えれば、人格の完成を目指すために生徒は学校に来ているのであり、生徒とともに人格の完成を目指すつつ生徒への教育活動をするのが我々自身の仕事であると言える。生徒は学習活動によって、そして我々は研修と修養によって、人格の完成を目指すというわけである。

話を協調に戻せば、宮沢賢治の言うところの、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という考え方に至る。

(4) 研究の目指す生徒像

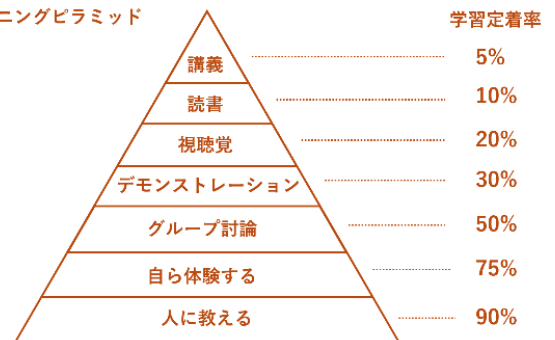
『学び合い』は、「分かっている仲間を孤独にしない」「分かっているふりして

孤独にならない」をモットーにしている。また、右のラーニングピラミッドにあるように、他の人に教える学習活動が学習定着率が最も高いことから、『理解できた』は『説明できる』が3番目のモットーである。

情けは人の為ならず。人に教えるのは、相手の学習を助けるだけでなく、自分の学習を深めることになる。逆に言えば、他の人に説明できなければ、本当に理解したことはない。

- ① 他と協調して学習活動ができる生徒
- ② 学んだことを誰にも分かるように説明できる生徒

ラーニングピラミッド



(5) 研究組織

- ① 研究部・・・【授業研究部】 研究授業や授業研究会の企画運営、授業改善や家庭学習の指導に関すること。学力の向上を目指す。
【学習環境部】 学級力向上や開発的生徒指導に関すること。多様性に関する研修を行い、特別支援教育の観点に立ったユニバーサルデザインの授業づくり、学級づくり、教室づくりを目指す。
- ② 研究推進委員会・・・校長、教頭、教務主任、研究主任、各研究部長で構成し、各研究部における取組の方向性を検討したり進捗状況を確認したりする。必要に応じて拡大して開催することもある。
- ③ 全体会・・・全体授業研究、学力調査結果の分析、学力向上プランの作成に関すること。

4 主な研究内容

(1) 授業改善

- ① 授業の始めでは、本時のめあてや学習内容の見通しを視覚的に、明確に示す。

- ② 授業の終わりでは、本時のまとめを確実に行う。
- ③ ねらいに即した「書く活動」を重視する。
- ④ 協働的な学習を取り入れる。効率的な学びにするために課題設定の工夫や意図的な班構成が必要。
- ⑤ 学期末に生徒アンケート（授業改善アンケート）を実施し、授業改善に役立てる。
- ⑥ 基礎学力タイムを設け、計算力や読解力、各教科の基本的事項の定着を目指す。

(2) 研究授業

- ① 研究授業を1人1回、なるべく2学期末までに行う。
- ② 全体研究授業を2回行い、その際にはKJ法による授業研究会を全員で開く。
- ③ 指導案は略案でもよい。

赤	技家、保体
青	社会、理科
黄	音楽、美術
緑	英語
紫	国語、数学
グレー	道徳、学活

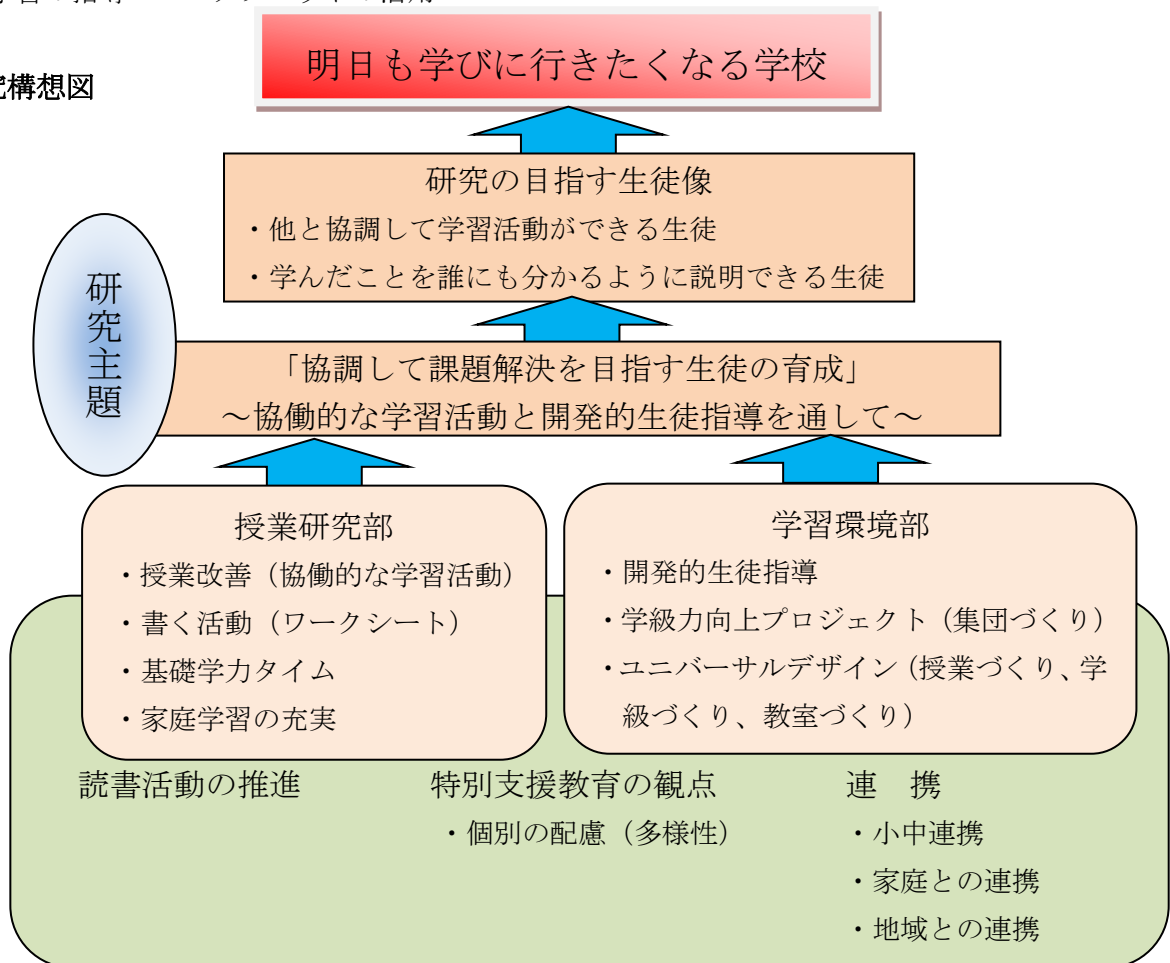
(3) 特別支援教育の観点から

- ① 伝え方の工夫
- ② ユニバーサルデザイン
- ③ ファイルの色

(4) その他

- ① 学級の集団づくり・・・学級活動の充実、開発的生徒指導（出番・役割・承認）
- ② 読書活動の推進
- ③ 家庭学習の指導・・・タブレットの活用

5 研究構想図



研究主題

6 学力向上プラン

方 策 1	学んだことを誰にも分かるように説明できる力を身に付けさせる。
具体的な取組	○授業の中に、協働的な学習活動を取り入れる。 ○授業の中で、ワークシート等を活用して「書く活動」を取り入れる。 ○定期テストでは、文章で説明させるような記述式問題を2問以上出題する。 ○基礎学力タイムを毎月設定する。
検証方法：目指す検証結果	○定期テスト：記述式問題の無回答0、および正解率70%以上 ○学期末の授業改善アンケート：授業満足度70%以上

7 終わりに

(1) 周りに合わせることではない

協調を強調したが、何もそれは、他の人に合わせなさいということではない。そうなれば、かつて問題視されていた画一的な教育であり、没個性であり、多様性に逆行する動きである。

山に登るイメージ。A山に登るか、B山にするか。意見が分かれたが折り合いをつけてA山に登ることにした。本時の「めあて」は、A山の頂上に全員が到達すること。山頂へのコースは1つだけではない。他の人と同じコースをたどる必要はない。限られた時間内に全員が登頂するためにはどうすればよいか、それが解決すべき課題である。複数のコースを選択する方法がよいのかもしれない。まずは、やってみよう！ 議論を交わし、作戦を立て、力を合わせる。そうしてチームワークを高めていく。失敗するかもしれない。でも、それも勉強。次に生かせばよい。要は、自分だけが成功すればよいということではないこと。協調の機会を与える、それが授業ではないだろうか。

Be Different. (人と同じことをするな)

(2) 不易と流行

4月1日から成人年齢が18歳に下がった。明治9年以来、146年ぶりである。その日の朝日新聞に、小学校教員の経験があり現在は作家のはやみねかおるさんが書いていた。「子どもに子どもは育てられない。子どもを育てるのが、大人です。子ども達をちゃんと育て、次の時代にバトンパスする。それが大人なのです。」

I C T教育推進の流れのなかで、金子光晴の「むこうむきになつて おっとせい」のように、反時代的と思われるかもしれないが、あえて「人格の完成」を取り上げた。学校教育が、将来の「国家及び社会の形成者」を育てることである以上、それは革命的な働きでもある。太宰治は『斜陽』の中で、「人間は恋と革命のために生まれて来たのだ」と書いているが、我々の言動一つ一つが、世の中を変革する力にもなり得ることを肝に銘じて、研修に励みたい。

老梅やいま渾身の花ひらく (令和4年3月27日、朝日俳壇)